

中学校

平成 17 年 度

教育研究員研究報告書

国	語
---	---

東京都教職員研修センター

目 次

I	研究主題設定の理由	2
II	研究の構想	3
III	研究の内容	
1	第1分科会（音声言語班）	6
(1)	研究副主題設定の理由と仮説について	6
(2)	研究の内容・主題に迫る手だてや工夫	7
(3)	指導の実際	7
(4)	まとめ	14
2	第2分科会（文字言語班）	15
(1)	研究副主題設定の理由と仮説について	15
(2)	研究の内容・主題に迫る手だてや工夫	16
(3)	指導の実際	17
(4)	まとめ	23
IV	研究のまとめと今後の課題	24

研 究 主 題

考える力、感じる力を高める個に応じた指導と評価の工夫

I 研究主題設定の理由

1 社会的背景

科学技術のめまぐるしい進歩や経済のグローバル化、情報化など社会が一層大きく変化する中、人々の価値観も多様化し、既存の概念で対応することが難しい時代を迎えている。今、まさに学校教育において、思考力・判断力をはじめとする児童・生徒の「確かな学力」の育成が求められている。

しかし、一方で、学力低下を危惧する声は止むことなく、国際調査等の結果もそれを裏付けるかのようなデータを示している。平成 16 年 12 月に公表された PISA（OECD 学習到達度調査 2003 年調査）の結果では、我が国の 15 歳学習者の「読解力」は前回（2000 年調査）時点の 8 位から 14 位に低下しており、中でも「中間層（レベル 3）」の割合が平均値を下回る結果となった。

PISA における読解力とは、①書かれている情報を取り出す力 ②書かれた情報の意味を理解し推論する力 ③書かれていることを知識や考えなどと結び付ける力 と定義されている。これらは、基本的に国語科において身に付けさせたい学力である。

これらの力を身に付けさせるためには、日々の授業において特に、考える力、感じる力を高めるための個に応じた指導の一層の充実を図るとともに、国語科の指導内容や方法についても、時代に即応した新しい在り方等を模索していく必要がある。

2 生徒の実態等

日常の国語の授業において、しばしば次のような生徒の実態が見られる。

- (1) 文章の読解において、自らの限られた経験や考えに基づく読み取りに終始してしまい、文章の主題に迫る読み取りができない。また、読解によって得た情報や感動を、自分の経験や今後の生き方につなげるような読み方ができない。
- (2) 同様のことは「話すこと・聞くこと」の学習にも見られる。現在、国語科の学習ばかりでなく、総合的な学習の時間の活動等により、表現活動を行う機会が以前より多くなった。
話す機会は確かに増えたが、一方で、上手な聞き手として育っているかという点と必ずしもそうではなく、生徒同士しばしば意見がかみ合わず、話し合いがうまく進められないことも多い。
- (3) 相手の真意を正確に感じ取り、論理的に思考するなど、情報の受け手としての学習と評価の機会は、生徒にとってまだ十分とはいえない。

3 本研究のねらい

平成 15 年 12 月、学習指導要領のねらいの一層の充実を図るよう、学習指導要領の一部改正が行われた。各学校において、生徒一人一人のよさや可能性を伸ばし、個性を生かす教育の一

層の充実を図ることが求められている。国語科においても個に応じた指導を一層充実するなど、効果的な指導方法や指導体制を柔軟かつ多様に導入し、生徒の学ぶ意欲を高め、学習内容を確実に身に付けることができるようにするための研究が求められている。

現在、発言・発表の能力や作文（論文）の能力を育成するための取り組みが盛んに行われている。こうした、いわば表現を伴う学習活動では、生徒個々の能力や実態の把握が比較的容易で個に応じた指導が十分に生かされるが、表現の前提としてあるべき理解や内面の充実等においては、一人一人のよさを生かし合う指導には困難も伴う。

本研究では平成16年2月の文化審議会答申等も踏まえ、生徒のよりよく考える力・感じる力の育成を通して、国語力の向上を目指すこととした。

Ⅱ 研究の構想

1 基本的な考え方

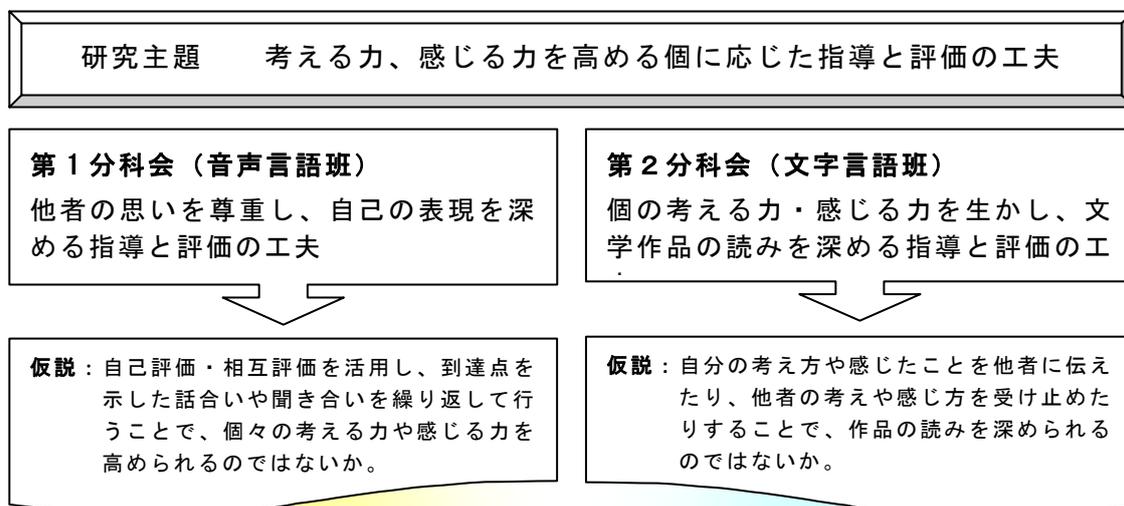
「考える力」、「感じる力」は、個人の思考にかかわる部分が多い。

心理学では、思考という働きは、学習や経験等によって頭（脳）の中に蓄えられた内容を様々に関係付け、新しい関係を作り出す働きと見なされている。思考力とはすなわち「関係を付ける力」である。

学習活動においては、自分の関係付けたものと他者の関係付けたものを比較し、その差異を認めたり、共通点に気付いたりすることで、新しい価値を見出すことができる。このような価値の発見や気付きをとおして、一人一人が自己の変容に気付くことができれば、生徒は学習の喜びや充実感、達成感を得て、さらに次の学習の意欲へとつなげることができるのではないだろうか。

本研究では、こうした考え方に基づき、生徒の考える力、感じる力を高めるためには、個の考えを深める活動に加え、生徒相互による意見の交換を相互に組み合わせることで、その効果を期待できると考えた。

これらの仮説を検証するため、次に示すように音声言語（話すこと・聞くこと）、文字言語（読むこと・書くこと）それぞれの側面から実際の授業において有効と思われる手だてを講じていくこととした。



2 研究の概略

(1) 第1分科会

全体研究主題：考える力、感じる力を高める個に応じた指導と評価の工夫

第1分科会（音声言語班）

副主題

他者の思いを尊重し、自己の表現を
深める指導と評価の工夫



①研究の必然性

- ・授業において生徒には、自分の考えや意見を発表することはできても、他者の意見を聞いて理解し、尊重しながら、自己の考えを深めていく力が不足している傾向が見られる。
- ・「聞く力」を客観的・論理的に評価することの難しさが課題である。



② 研究の方法

自己評価・相互評価を活用し、到達点を示した話し合いを繰り返して「話す力・聞く力」を高めることで、個々の考える力や感じる力を高める。そのために、

ア 学習指導要領に準拠した「話す・聞く」評価リストを作成する。また、話し合いにおけるテーマの方向性を明確にすることをねらい、学習活動を「群読を作ること」に設定する。

イ 評価シートに基づき、話し合いの授業において段階に応じて自己評価・相互評価を繰り返すことで、他者の思いを尊重するとともに、自己の表現を高めていく。

③ 研究の流れ・内容及び成果

研究過程	研究の内容	概 要
(調査)	生徒の実態の把握	<ul style="list-style-type: none"> ・「聞き取りテスト」の結果の考察 ・「群読」や話し合いの授業の実践報告 <p style="text-align: center;">↓</p> <p style="text-align: center;">「話す力・聞く力」の不足</p>
理論検討	研究副主題の検討 仮説及び研究の視点の検討	<p>主に扱う領域を「話すこと・聞くこと」に設定し、課題として挙げられた「評価の工夫」も副主題として設定した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・到達目標をはっきりさせる。→生徒自身に改善すべき点を明らかにさせたり、達成感を味わわせたりすることで、考える力・感じる力が高められるのではないかと。 ・「話す・聞く」評価リストの作成→学習指導要領に準拠し、「話すこと・聞くこと」に関するすべての授業に対応できるような評価リストを作成する。 ・教材の選定→詩の群読にかかわる話し合い（単元構成は5時間程度）
実 証	具体的な指導案の検討	<ul style="list-style-type: none"> ・話し合いのためのワークシートの作成 ・自己評価シート・相互評価シートの作成 ・話し合いのグループを少人数に設定 ・群読の発表を2回設定。段階的な自己評価・相互評価
まとめ	成果と今後の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・「話す力・聞く力」の向上を図ることで、一人一人の考える力・感じる力を高めることができた。 ・「話す・聞く」評価リストの有効性が検証できた。 ・「話す・聞く」評価リストの活用方法の更なる検討が課題。

(2) 第2分科会

全体研究主題：考える力、感じる力を高める個に応じた指導と評価の工夫

第2分科会（文字言語班）
副主題
個の考える力・感じる力を生かし、
文学作品の読みを深める指導と評価
の工夫

①研究の必然性

- ・生徒は学年が進むにつれ「文学的文章」に対する苦手意識が大きくなる。(アンケート調査)
- ・時間数の減少などにより、時間をかけて文章を読み深める授業の設定が難しい状況にある。



② 研究の方法

自分の考え方や感じたことを他者に伝えたり、他者の考えや感じ方を受け止めたりすることで、作品の読みを深める。そのために、

ア 長い文学作品を読んで、内容や登場人物について考えたり、作品から生き方のヒントを得たりすることで、読書の楽しみを味わわせ、自ら進んで本を読む生徒の育成を図る。

イ 生徒自身が自己の変容を認識できるように、評価の方法を工夫することで、「読むこと」にかかわる力を高め、読みを深める力を向上させる。

③ 研究の流れ・内容及び成果

研究過程	研究の内容	概 要
理論検討	研究副主題の検討	主に扱う領域を「読むこと」に決定
	目指す生徒像の検討	発達段階に即して学年ごとに目標を設定
	仮説の検討	文学作品の読み方の工夫、個の変容を確かめる工夫をすることで、生徒の読みが深まるのではないかと。
	研究の視点の検討	<ul style="list-style-type: none"> ・教材の選定・扱い方→指導方法の工夫により「<u>重み</u>」(注)のある作品を長期間に渡って扱うことも可能ではないか。 ・個の変容を生徒自身が認識できるようにするための評価の仕方として、読むことを自己評価する「チェックシート」を継続的に使用することが有効ではないか。 ・授業展開として、「個 → 集団 → 個」の形態による学習が有効ではないか。
(調査)	生徒の実態の把握	文学作品を読むことの学習に関するアンケート調査実施
実 証	具体的な指導案の検討	<ul style="list-style-type: none"> ・発問については、細部にわたらず要点のみをおさえる。 ・「集団」での活動では、小集団での意見交換を基に読みを深める。 ・長期にわたって扱う留意点として「チェックシート」を活用する。また、「つながり」となる感想文・手紙文などを残し、個の変容を生徒自身に実感させる工夫を行う。
まとめ	成果	<ul style="list-style-type: none"> ・「重み」のある作品を扱う際の方法が提示できた。 ・「チェックシート」の有効性が提示できた

(注)「重み」について、

第2分科会では、「分量が多く教科書では扱われることが少ない作品」、「『感じる力』(平成16年2月文化審議会答申)を喚起できる作品」、「現在の生き方や価値観と結びついている作品」を「『重み』のある作品」とした。

Ⅲ 研究の内容

1 第1分科会（音声言語班）

(1) 研究副主題設定の理由と仮説について

副主題：他者の思いを尊重し、自己の表現を深める指導と評価の工夫

第1分科会では、研究主題の「考える力」及び「感じる力」について、「話すこと・聞くこと」の力の育成という観点から、次のように考えた。

「考える力」	言葉に表れた他者の思いを論理的に把握し、その立場や考えを尊重する力
「感じる力」	他者の思いを感じ取り、自己の表現に生かし、表現そのものを高める力

「話すこと・聞くこと」の力の育成を目指すとき、「話し合う力」すなわち、自分の意見や思いを適切に発表することができ、他者の意見を尊重して取り入れ、自分の表現や考えをさらに豊かにすることができることが重要である。

第1分科会ではこの点に着目し、多様な意見から一つの意見を構築していく中で様々なことを学び合い、それを個々の学びに生かし自己の変容を認めることができる活動を重視した。

実際の指導においては、次のような生徒の実態が多く見られる。

- ・自分の意見や感じたことを発表することはできるが、話し合うことができない。
- ・自己主張はするが、他人の主張は受け入れられない。
- ・一方的に自分の意見を押しつけ合うだけで話し合いが終わってしまう。

これらの理由として、①発表やスピーチといった自己表現としての「話すこと」の指導に重点が置かれているが、「聞くこと」については受動的な要素が強く、成果が見えにくいことや客観的な評価がしにくいこと ②電子メールの普及やテレビでのテロップの多用など、求めなくても情報が容易に入ってくる社会的環境の影響もあり、「聞くこと」が十分に行われなくなっていることが挙げられるのではないかと考えられる。

「聞くこと」と「話すこと」の活動は、本来、切り離して考えることができないものであり、双方の指導内容の系統性を踏まえて指導することが重要である。第1分科会では特に、「聞くこと」の系統的な指導を行いながら、話し合い活動を行わせることが重要であると考えた。

確かに、「話すこと・聞くこと」の活動は音声として消えてしまうなど、しばしば一過性のものであるため評価の難しい面はある。しかし、自己評価や相互評価を繰り返し行うことで評価の有効性が増し、その結果、話し合いの力が高まると考えられる。また生徒は、話し合い活動の中で自らの到達点を確認していくことで、個に応じて力を高めていくことができるのではないかと考えられる。

第1分科会の研究仮説

「自己評価や相互評価を活用した話し合いや聞き合いを繰り返すことで、考える力、感じる力を高めることができるのではないかと考えられる。話し合いや聞き合いの活動の中で自らの能力の到達点を確認していくことで、個に応じて考える力、感じる力を高めることができるのではないかと考えられる。」

(2) 研究の内容・主題に迫る手だてや工夫

① 「話す・聞く」評価リストの作成

「話すこと・聞くこと」に関する到達目標を具体化する評価リストを作成する。「話すこと」と「聞くこと」は不可分の関係にあるので、両者を対応させた形式にする。

このリストの作成により、3年間を見通した上での各授業時間における目標が明確になり、1時間ごとに段階的に学習を進めることができるようになる。また、習熟の程度に応じて生徒個々の目標を設定することも可能になると考えた。

② 評価の工夫

自己評価は、評価を行う分量が生徒の負担にならないように配慮し、作成した評価リストの項目の中から単元に合わせて重点化を図る。評価シート等の項目の文言は、評価リストの表現そのままではなく、生徒に理解しやすいよう単元の内容に即した具体的な表現にする。

「自己評価シート」は1単元で1シートになるように作成し、生徒自身で学習の進ちょく状況が把握できるようにする。また、「聞くこと」にかかわる相互評価についても、評価項目のポイントを明確にして相手に示す方法を工夫し、授業時間内で効率的に行えるようにする。

③ くり返し学習を取り入れる

1単元の中でくり返し学習を展開し、他者の思いを「聞くこと」が、実は自己の表現に生かされることを検証する。今回は群読を通し、発表後の自己評価・相互評価を基にした話し合いを経て再度発表を行うことで、自グループや自身の変容を確かめる。

(3) 指導の実際（指導例・第1学年）

① 指導のねらい

- ・話し合いを通じて他者の意見を聞き、自分の考えを深めることをねらいとする。
- ・詩に関する学習活動を通して、群読による表現を共同で作り上げる過程で自分の考えや気持ちを相手に理解してもらえるように話したり、話し手の意図を考えながら話の内容を聞き取ったりする力を身に付けさせる。

② 使用教材

田村隆一「木」（出典：「詩のわかる本中学一年」畑島喜久生編 国土社）

「鑑賞と朗読ワークシート」（自作資料）

③ 教材選定の理由

グループで群読するためには、みんなの納得がいくようにグループの考えをまとめ、どのような読みをすればより効果的になるかなど話し合い活動が重要である。

「木」は、倒置、省略、対句などの表現技法があり、読み方によってさまざまな工夫をする余地があり、話し合いの中でさまざまな意見交換が可能な作品である。

④ 個に応じた指導

ア 話し合いを進めるために、各自の考えをまとめる「鑑賞と朗読ワークシート」を利用し、個別に学習支援を行う手だてとする。授業後にワークシートへのアドバイスを記入する。

イ 「話す・聞く」評価リスト（11ページ）から今回の授業で求められる力を抜粋して作った「自己評価シート」（12ページ）を利用することで、個に応じた目標の設定をさせる。

ウ 話し合いの中で自分の意見を出せない生徒に対しては、個に応じたヒントを与え、話し合いに参加できるよう支援する。

⑤ 評価規準

国語に対する関心・意欲・態度	話すこと	聞くこと
<ul style="list-style-type: none"> ・詩を鑑賞し、どんな気持ちで読むかを意欲的に考えようとしている。 ・話し合いの中で積極的に発言しようとしている。 ・他者の発表を集中して聞き、表現の方法や工夫など、よいところは自分に取り入れようという姿勢で学習に臨んでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・聞き手に正対して話している。 ・話す速度・音量に注意しながら話している。 ・言葉の調子や間の取り方などに注意して話している。 ・適切な場面で（話すべき時に）話している。 ・話し合いの目的に沿って自分の意見を述べている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・話し手に正対して聞いている。 ・話す速度・音量に注意して聞いている。 ・言葉の調子や間の取り方などに注意して聞いている。 ・話をさえぎらないで、最後まで聞いている。 ・話が目的に沿っているか、聞き分けている。

⑥ 指導計画

時	学習内容	評価の観点
1	<p>「木」を鑑賞しよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教師による範読を聞く。 ・全員で詩を音読する。 ・ワークシートに従って、詩の鑑賞と朗読プランを作成する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○「考えるヒント」を参考にし、自分なりに鑑賞し、どんな気持ちで読むかを考えることができる。
2	<p>群読とは何かを知ろう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・群読とは何か、映像を見て、イメージする。 ・本日のねらいと到達目標を確認する。 ・グループに分かれて群読プランを検討する。 <ul style="list-style-type: none"> ①各自が自分の朗読プランをプレゼンテーションする。 ②班の中でベースとなるプランを選び、群読プランを作成する。 ・話し合いについて自己評価シート（12ページ）に記入する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○自分の考えたプランをきちんと相手に伝えることができる。 ○友達の意見をしっかり聞いて、内容を理解することができる。 ○全員の意見を調整しながら、グループのプランを作り上げることができる。

3	<p>群読を作るために、話し合おう</p> <ul style="list-style-type: none"> 自己評価シートを見て、本日のねらいと到達目標を確認する。 グループに分かれて群読プランの検討をする。 <ul style="list-style-type: none"> ①群読プランを完成させる。 ②群読の練習をする。 話し合いについて、自己評価シート（12ページ）に記入する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○自分の考えたプランをきちんと相手に伝えられる。 ○友達の意見をしっかり聞いて、内容を理解することができる。 ○全員の意見を調整しながら、グループのプランを完成させることができる。
4	<p>中間発表をして、相互評価しよう（本時）</p> <ul style="list-style-type: none"> 各グループで群読の練習と最終確認をする。 3グループごとに3箇所に分かれて群読発表を行う。相互評価シート（12ページ）を使って、互いに態度・声・内容の3観点で評価を行い、改善点を指摘し合う。 グループごとに再度話し合いをする。相互評価で指摘された改善点や反省を生かして、群読プランを再構築する。 発表と話し合いについて自己評価シートに記入する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○相互評価や自己評価を基に、改善すべき点や工夫点を考え、話し合いを通して聞き手に伝えることができる。 ○友達の意見を聞いて、内容を理解することができる。 ○全員の意見を調整しながら、グループのプランを再構築することができる。
5	<p>全体の前で群読を発表しよう</p> <ul style="list-style-type: none"> 各グループで最終確認と練習を行う。 グループごとに全体の前で、群読を行う。 発表の前に、自分たちの群読の工夫点と改善した点を簡単に紹介する。 相互評価シートを使って、態度・声・内容の3観点で評価し、よかった点を書く。 全体を振り返って自己評価シートに、話し合い及び群読について記入する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○他者の発表をよく聞き、評価することを通じて、他者の工夫点やよい点を認めることができる。

⑦ 指導の展開例（第4時）

ア 本時の目標

互いの発表を聞いて改善点を指摘し合い、改めて話し合っ、群読プランを再構築する。

イ 本時の評価規準と評価方法

<p>おおむね満足 できる状況</p>	<p>中間発表に主体的に参加し、相互評価においては相手の班の改善点を指摘し、その後の話し合い活動でも自分の班の群読をさらに高めるように意見を言うことができる。</p>
-------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------

○評価方法・・・活動中に一人一人の学習状況を観察する。具体的な観点としては、発表を主体的に行っているか、群読がより高まるような発言を行っているか、人の意見を聞いているか、など。以上の観点が満足できる状況にないとき、Cと評価する。

「C評価」の生徒に対しては、話し合いに参加できるように促し、主体的に話し合う態度の育成に努める。自己評価シートに低い評価をつけた生徒に対しては、具体的な改善点を示し、次の課題に意欲的に取り組めるよう個に応じた指導をする。

学習活動	指導上の留意点	評価の実際
1 自己評価シートを使用し、本日の活動と目的を確認する。	<ul style="list-style-type: none"> ・あらかじめ4人の群読グループで座らせる。 ・グループ発表を相互評価し、それを基にして、群読を更によいものに上げるために、再度、話し合いをすることを確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習状況の観察を行う。 ・自己評価シートを見て集中して聞いているか。 【関】 ・筆記用具を持ちながら参加しているか。【関】
2 グループごとに群読の練習と最終確認を行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・前回の話し合いで不十分だったところは話し合いをしてから練習に入るよう指示する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習状況の観察を行う。 ・すぐに4人グループに移行できたか。話し合い・練習を積極的に行っているか。【関】
3 中間発表を行う。 相互評価シートを使って、互いの群読の改善点を指摘し合う。 (教室配置) 発表するグループは一列となり、聞いている人たちに正対する形で発表する。教室の前後、左右の空間を利用し、できるだけ3グループごとのまとまりとなるよう配置を工夫する。	<ul style="list-style-type: none"> ・グループごとに3箇所へ移動させる。全体発表のリハーサルとして取り組み、互いの改善点を見つけることがねらいであることを意識させる。 ・一つのグループの発表が終わるたびに残りの2グループは改善点を発表し、評価された側は指摘されたことを聞き取ってメモするよう指示する。スムーズに評価が受けられるよう、事前に、評価し合う相手を指定しておく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・3ヶ所を巡回し、学習状況の観察を行う。 ・相手の発表に集中しているか。【関】 ・他のグループの改善点を真剣に考えて発表できるか。【話・関】 ・自グループへの評価を聞き取ってメモしているか。【話・関】
4 グループで話し合いを行い、群読プランを再構築する。 できあがったプランを使って、練習する。	<ul style="list-style-type: none"> ・他のグループから指摘されたことや実際に発表して気付いたことを通して、各自が改善すべき点を発表し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・グループを巡回し、学習状況の観察を行う。 ・話し合いや練習を積極的に行っているか。【関】 ・話し合いが目的に沿っているか。【話・関】
5 自己評価シートを使って、各自で自己評価をする。	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでの話し合いと比べて、自己の表現方法や内容等に関する変化に着目させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分自身の話し合いの内容を振り返って書いているか。【話・関】

※次ページの「話す・聞く」評価リストを基にして、実際の授業で使用する自己評価・相互評価シートを作成し、学習における具体的な達成目標を明確にさせた。なお、この評価リストは、生徒自身から見た到達点を示しているため、文末に「～できる」という言葉を使用している。

(資料1)

「話す・聞く」評価リスト

		話すこと	聞くこと
ア 心得・態度	目標	自分でさまざまな話題を選び、考えを深めながら話すことができる。	さまざまな話題に関心を持ち、考え方を深めながら聞くことができる。
	1	聞き手の方に体を向けて話すことができる。	話し手に体を向けて聞くことができる。
	2	聞き手の方を見て話すことができる。	話し手の目を見て聞くことができる。
	3	テーマにふさわしい話題を選び、話すことができる。	何が話題なのか理解しながら、聞くことができる。
	4	聞き手の反応を見ながら、話すことができる。	適切な相づちを打ちながら聞くことができる。
	5	自分で選んだ話題について考えをまとめ、話すことができる。	話し手の話題について、自分の考えがもてるように聞くことができる。
イ 構成	目標	中心的な話題を意識しながら、付加的な部分や考えなども交え、展開を構成しながら話すことができる。	中心的な話題を意識しながら、話の論理的な構成を聞き取ることができる。
	1	話の中心を意識して、話すことができる。	話の中心を聞き取ることができる。
	2	事実と意見を区別しながら、話すことができる。	事実と意見を聞き分けることができる。
	3	意見とたとえを交えて話すことができる。	意見とたとえを聞き分けることができる。
	4	意見の理由や根拠が伝わるように、話すことができる。	意見の理由や根拠を聞きとることができる。
	5	聞き手が理解しやすいように、順番を考えて話すことができる。	話の順番を理解しながら、聞くことができる。
ウ 表現・工夫	目標	適切な語句を選んだり、効果的な表現をしながら、説得力のある話ができる。	適切な語句が使用されているか、また表現に工夫がなされているか、聞き取ることができる。
	1	話す速度・音量に注意して、話すことができる。	話す速度・音量に注意して、聞くことができる。
	2	言葉の調子や間の取り方などに注意して、話すことができる。	言葉の調子や間の取り方などに注意して、聞くことができる。
	3	相手や目的に応じた言葉づかいで、話すことができる。	相手や目的に応じた、適切な言葉づかいで話しているか、注意して聞くことができる。
	4	説得力のある語句や表現を工夫して、話すことができる。	語句や表現の工夫の効果をとらえて、聞くことができる。
エ 話合い	目標	相手の考えを尊重し、目的に沿って効果的に展開するように話し合い、考えを深めることができる。	
	1	適切な場面で（話すべき時に）、話すことができる。	話をさえぎらないで、最後まで聞くことができる。
	2	話し合いの目的に沿って、自分の意見を話すことができる。	話が目的に沿っているか、聞き分けることができる。
	3	相手の話を聞いて、新しく知ったことを認識し、自分の感想・意見を述べることができる。	
	4	お互いの意見の共通点や相違点を明らかにし、比べ合うことができる。	
	5	お互いの意見のよいところを認めて話し合い、自分の考えを深めることができる。	

(資料2) 自己評価シート

「木」を群読しよう・自己評価シート

() 組 () 番氏名 ()

- ★ 自己評価シートの使い方…今日の目標の確認 → 話し合い (授業) → 目標に対する自己評価 → 身につけた力への自己評価
- ★ 評価の段階 (各評価共通) … A. とてもよくできた B. まあまあできた
C. あまりできなかった D. ぜんぜんできなかった

(1) 群読プランの話し合い (1) 月 日 ()

(目標) ① 自分の考えたプランを、きちんと相手に伝える。(話す)	自己評価
② 友達の見解をしっかりと聞いて、内容を理解する。(聞く)	① A・B・C・D
③ 全員の意見を調整しながら、グループのプランを仕上げる。(話し合う)	② A・B・C・D
	③ A・B・C・D

(2) 群読プランの話し合い (2)・群読の練習 月 日 ()

(目標) ① 自分の考えたプランを、きちんと相手に伝える。(話す)	自己評価
② 友達の見解をしっかりと聞いて、内容を理解する。(聞く)	① A・B・C・D
③ 全員の意見を調整して練習しながら、よりよいグループのプランを仕上げる。(話し合う)	② A・B・C・D
	③ A・B・C・D

(3) 中間発表・群読プランの再構成 月 日 ()

(目標) ① 相互評価や自己評価をもとに考えた改善点や工夫をきちんと相手に伝える。(話す)	自己評価
② 相互評価や友達の見解をしっかりと聞いて、内容を理解する。(聞く)	① A・B・C・D
③ 群読を完成させるために、改善点について話し合う。(話し合う)	② A・B・C・D
	③ A・B・C・D

(4) 2回目の発表が終わって 月 日 ()

① 話し合いの態度について (自己評価 A・B・C・D)

--	--

② 話し合いによって気づいたこと・自分の中で深まったこと(自己評価 A・B・C・D)

--	--

【どんな力がついたかな?】

★ それぞれの項目について、A・B・C・D を記入しましょう。

話し合い	自己評価
(話す)	
聞き手に体を向けて話したか。	
聞き手の方を見て話したか。	
何が一番言いたいのかをきちんと伝えられたか。	
自分の意見がなぜそうなったのかを相手にわかりやすく伝えられたか。	
(聞く)	
話し手に体を向けて聞くことができたか。	
話し手の目を見て聞くことができたか。	
話し手が何を一番伝えたいのかを聞き取ることができたか。	
話し手の意見がなぜそうなったのかを聞き取ることができたか。	
(話し合う)	
話をさえずらずに聞き、話すべき時に意見を言えたか。	
話し合いの内容がずれていないか。目標に沿って考えられているか。	
話し合いの中で、今まで自分が考えなかった内容や意見を見つけることができたか。	
いろいろな意見を比べ合い、整理することができたか。	
お互いの意見の良いところを認めて、自分の意見を深めることができたか。	

※自己評価シートは、毎時間の到達目標とねらいを確認するために使用する。

1 単元で1シートになるよう作成し、生徒自身にとってどんな力がどの程度ついたかなど、自己の変容が分かるように工夫した。

※記述式の自己評価には、生徒の

「自分の意見を押しつけるのではなくて、相手の意見も聞くことが大切だと思った。」

「たった一つの詩に対しても、一人一人思っていることが違って、興味深かった。」

「いろいろな考えをひとつにまとめて、群読を作るのは難しいと思った。」

などの意見が寄せられた。

(資料3) 相互評価シート

「木」を群読しよう…… 最終発表(1年 組 番氏名)

1 班の発表を聞いて……

強弱 (A・B・C・D)	良かったところ・(前に聞いた班は) 成長したところを書きましょう。
連さ (A・B・C・D)	
間 (A・B・C・D)	
感情 (A・B・C・D)	
工夫 (A・B・C・D)	

2 班の発表を聞いて……

強弱 (A・B・C・D)	良かったところ・(前に聞いた班は) 成長したところを書きましょう。
連さ (A・B・C・D)	
間 (A・B・C・D)	
感情 (A・B・C・D)	
工夫 (A・B・C・D)	

3 班の発表を聞いて……

強弱 (A・B・C・D)	良かったところ・(前に聞いた班は) 成長したところを書きましょう。
連さ (A・B・C・D)	
間 (A・B・C・D)	
感情 (A・B・C・D)	
工夫 (A・B・C・D)	

4 班の発表を聞いて……

強弱 (A・B・C・D)	良かったところ・(前に聞いた班は) 成長したところを書きましょう。
連さ (A・B・C・D)	
間 (A・B・C・D)	
感情 (A・B・C・D)	
工夫 (A・B・C・D)	

5 班の発表を聞いて……

強弱 (A・B・C・D)	良かったところ・(前に聞いた班は) 成長したところを書きましょう。
連さ (A・B・C・D)	
間 (A・B・C・D)	
感情 (A・B・C・D)	
工夫 (A・B・C・D)	

6 班の発表を聞いて……

強弱 (A・B・C・D)	良かったところ・(前に聞いた班は) 成長したところを書きましょう。
連さ (A・B・C・D)	
間 (A・B・C・D)	
感情 (A・B・C・D)	
工夫 (A・B・C・D)	

7 班の発表を聞いて……

強弱 (A・B・C・D)	良かったところ・(前に聞いた班は) 成長したところを書きましょう。
連さ (A・B・C・D)	
間 (A・B・C・D)	
感情 (A・B・C・D)	
工夫 (A・B・C・D)	

8 班の発表を聞いて……

強弱 (A・B・C・D)	良かったところ・(前に聞いた班は) 成長したところを書きましょう。
連さ (A・B・C・D)	
間 (A・B・C・D)	
感情 (A・B・C・D)	
工夫 (A・B・C・D)	

8・自分の班への意見をまとめましょう。

--	--

(資料4)

<話し合いの様子>



1 グループ 4 人の少人数としたことで、通常の 6 人班（生活班）よりも話し合いに参加しやすくなった。話し合いから中間発表の形式にスムーズに移動するために、あえて机を使用せず、いすのみとした。そのため、互いの距離が近づき、話し合いが効果的にできるなどのメリットが生まれた。

<中間発表の様子>



3 箇所に分かれて発表することにより、全体として時間の短縮ができた。
また、1 グループの人数が少ないため集中して聞くことができ、互いにより詳細な評価をすることができることにつながった。

(4) まとめ

音声言語班では、副主題「他者の思いを尊重し、自己の表現を深める指導の方法と評価の工夫」に基づき、研究を進めてきた。ここでは、検証授業を行いながら検討を重ねた中で得られた成果と今後の課題についてまとめる。

① 成果

「話すこと」「聞くこと」を段階的に指導し、生徒自身が自己の活動の質を高めていくための指標として、「話す・聞く」評価リストを作成し、授業における「話し合い」の各場面で活用した。その結果、次の成果を得ることができた。

- ア 「話す・聞く」リストの内容に関連させて作成した「評価シート」を用いて自己評価・相互評価を行う上で、個の話す力を高めることができた。
- イ 課題にくり返し取り組むことで、群読による学習活動を通じ、表現する力が付いた。
- ウ 自己評価・相互評価を行う中で、生徒が自ら次の目標を設定する力が付いた。

話し合いをくり返す中で、生徒が評価シートに書かれた内容を意識し、聞く姿勢にも変化が見られるようになった。他者の「思い」を受け止め、自身の参考にすることによって、グループとしてよりよい群読を作り上げようとする意欲が高まった。

発表と評価をくり返す際、1回目の相互評価では主に改善点を指摘するようにし、2回目の相互評価ではよかった点や成長した点を指摘するように指導した。これにより、生徒の学習に対する集中力や目的意識が高まると同時に、表現そのものにも深みが増した。例えば、これまでに群読の教材を扱ったときに比べ、「間」や「感情のこめ方」について丁寧に検討する班が多くなり、表現の根拠を話し合うことで、群読する詩に対する読解も深まった。話し合いにおいても群読においても、意図的にくり返すことで学習方法に習熟させることが有効であることが分かった。

自己評価の内容は、毎時間の目標を明確にするため、最大でも3項目に絞った。相互評価を組み合わせることで、生徒が自らの話し合いや群読についてしっかりとした目標を設定していた。

② 今後の課題

ア 評価リストの活用方法

今回は群読という手法を通して「話し合い」を指導してきた。

話すこと・聞くことの活動には、他にもスピーチやパネルディスカッション、ディベート、研究発表など様々な手法がある。評価リストはいずれにも対応できるように作成したが、実際に評価する際、生徒の実態に合うような文言となるよう工夫し、さらに適切な評価シートを作成する必要がある。

イ 指導上の留意点

教材に合わせた自己評価・相互評価によって、明らかに生徒の自覚は高まったが、生徒の行う自己評価と指導者の評価にはずれが生じる場合がある。評価リストをくり返し使用することによって、各項目に対する生徒の理解が深まり、評価内容の精度が高まることが期待される。したがって、各学校の生徒の実態に応じた評価シートを作成し、評価項目に関する理解を十分に深め、年間を通じて活用していく必要がある。また、評価シートで、自分に対し著しく低い評価を付けた生徒への個別の対応を更に工夫する必要がある。

2 第2分科会（文字言語班）

(1) 研究副主題設定の理由と仮説について

副主題：個の考える力・感じる力を生かし、文学作品の読みを深める指導と評価の工夫

第2分科会では、「読むこと」の意義について、次のように考えた。

読書は、知らない世界の出来事や自分では経験できない事柄を疑似体験させてくれる貴重な手段であり、多くの価値観や感動にふれ、心の成長を遂げていく中学生にとって意義は大きい。

イメージを豊かに広げ、自己の表現力の向上や複雑な思考への指針となる。とりわけ文学作品からは主人公の生き方・考え方への共感等とおし、人生のヒントを得ることもある。

近年、読書離れが問題とされているが、生徒は読書を好まないというわけではなく、生活習慣の中に読書が定着しにくいことに課題がある。また、ストーリーは追えるが、描写の精読を苦手に行っている者が多く、曖昧な理解で済ませてしまう傾向が見られる。

指導内容の精選や授業時数の減少により、国語の授業で長編作品をじっくりと読み味わう機会が少なくなっている。

本来、思考や情緒といった心理的作用は成長するに従って発達していく。中学校時代に育つ「感じる力」に着眼し、他者との意見の交換などを通じた読書活動を設定することは、自分の読書以上の体験を味わわせることにつながるのではないだろうか。

第2分科会では、文学作品の読みを深める方法として、生徒が自他の読みを尊重し、読書活動の中で発見する喜びを知り、さらに深い読み取りにつなげられるような指導と評価の工夫を図ることとした。

指導の工夫としては、指導計画や教材の選定・提示の仕方、学習後に次のステップへどうつなげるのかといった点がある。

指導計画：学習活動により個の変容が認識できるのに十分な時間

（変容の喜びや発見を次の学習に継続）

教材選定：ある程度まとまった重み（量感）のある作品

（個の価値観の発達を喚起できる作品の選定）

教材提示：生徒の発達段階、学習目標に照らした効果的な提示の仕方

展開関連：変容の過程を確認し、次段階へ意欲を維持できるような記録の方法

評価の工夫として学習指導要領の指導内容を念頭に置いた形態にすることで、生徒自身の評価に資するだけでなく、指導者の評価にも役立てることができると思う。

評価形態：年間を通じた読みの単元を一覧にして学習項目を概観できるようにする。

評価方法：授業後に簡潔に点検できる方法として、チェックシートを用いる。

第2分科会の研究仮説

「読書の楽しみを味わわせ、読むことを通して、個の変容に気付くような評価の工夫を行うことで、文学作品の読みを深めることができるのではないか。」

(2) 研究の内容・主題に迫る手だてや工夫

① 「考える力・感じる力」の定義

第2分科会では、「考える力」及び「感じる力」について、平成16年2月3日文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」を踏まえ、「読むこと」の力の育成の観点から次のように考えた。

「考える力」	分析力・論理構築力などを含む、論理的思考力
「感じる力」	相手の気持ちや文学作品の内容・表現、自然や人間に関する事実などを感じ取ったり、感動したりする情緒力

② 扱う「文学作品」について

- ・分量が多く、教科書ではあまり扱われない作品（「重み」のある作品：5ページ参照）
- ・楽しく充実感をもって読める作品
- ・共感したり、批判したり、自由な意見が出る作品
- ・登場人物の生き方について考えることができ、自分自身の生きるヒントにできる作品

③ 目指す生徒像

学年	個の活動において	集団の活動において
1	楽しく読むことができ、文章に表れているものの見方や考え方を理解し、自分のものの見方や考え方を広くできる。 (C 読むこと 第1学年 オ)	周りの人の意見を聞いたり、教師のアドバイスを聞いたりすることで、ものの見方や考え方が広がっていく。
2	読んだ充実感を味わい、文章を読んで人間や社会、自然などについて考え、自分の意見を持ち、今回の読書を次回の読書につなげられる。 (C 読むこと 第2・3学年 エ)	いろいろな考え方の人の立場に立つことで、自分の見方や考え方を変えることができたり、確信をもったりする。
3	文章をヒントに人間、社会、自然などについて一歩踏みこんで考え、自分の生き方・考え方のヒントにできる。 (C 読むこと 第2・3学年 エ)	文章と自分とのかかわりや登場人物と自分との対比を通して、生き方・考え方のヒントを得る。

④ 指導の手だて

ア 3年間を見通した系統性のある学習形態

各学年ごとに目指す生徒像をはっきりさせた指導目標を立て、授業を展開する。

イ 「重み」のある文学作品を扱う

「重み」のある作品を、各学年にわたるなど、複数回に分割して指導し、作品に対する読みや考え方を深めるなど、成長する自分自身について生徒に実感させる。

ウ 次の単元（もしくは学年）につながる評価

3年間を通じて共通の「読むことのチェックシート」（20ページ）を使用し、自己評価を重ねていく中で、自分の弱点を知ったり、変容を確認させたりする。

エ 他の生徒からも学ぶ学習形態

「個 → 集団 → 個」の形態で学習を進め、他の生徒の考えにふれたり、自分の考えを確立したりする。

(3) 指導の実際

① 実践内容

ア 指導のねらい	<ul style="list-style-type: none">・一つの作品を読み通したという充実感をもつ。・文章を読んで、人間・社会・自然などについて考え、自分の意見や考えをもつ。・学習活動を通じて、次の読書につなげる（読書の楽しみを得る）。
イ 使用教材	「さかあがりの神様 - 『日曜日の夕刊』より - 」（新潮文庫・重松 清） ※教科書に掲載されていない教材であるため、今回は、上記の書籍を生徒の人数分購入してテキストとして使用した。
ウ 教材選定の理由	<ul style="list-style-type: none">・現代の生徒にとって身近な話題・状況が書かれている。・書き手の思いや心情に迫り、それを踏まえ、読み手としての立場から人間・社会などについて考え、生徒自身が自分の意見をもつことができる作品である。・言葉が平易で、中学生にとって読みやすい作品である。・様々な教材提示の方法が考えられる教材である。（例 現在と過去の場面の順序が交錯しているなど）・ある程度の「重み」のある作品であり、継続して指導するのに適した分量である。また、生徒自身の精神的な成長に伴い、自身の読みに関する変容の自覚が期待できる教材である。
エ 個に応じた指導	<ul style="list-style-type: none">・自分自身の変容を生徒自信が認識できるようにするため、読むことを自己評価する「文学的文章を読むことチェックシート」（20 ページ）を作成し、継続的に使用する。・授業展開として「個 → 集団 → 個」の流れに沿って、自他の読みを深める工夫を行う。
オ 各学年での教材の扱い方・指導計画	<ul style="list-style-type: none">・全編を6つの段落に分け、それぞれ、場面：過去Ⅰ・Ⅱ、現在Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳとする。・3学年に分けて読む場合の分け方、チェックシートと関連させた指導の方法等については、次ページに示す。
カ その他	「重み」のある作品を読む際の指導上の留意点として、次の各点が挙げられる。 <ul style="list-style-type: none">・指導目標を明確にする。 → 読みが深まる。・関心をもって読む手だてを工夫する。 → 飽きずに読める。・読み通したという充実感を味わわせる。 → 次の読書につながる。 ※作品文中に両親が離婚した少年について語られる場面があるが、授業の実施に当たっては、生徒の心情等に十分配慮した指導を行うよう留意する。

② 3年計画で教材全編を扱う場合の例

○第1学年（4時間扱い）

※A1、B1・・・はチェックシートの記号に相当

場面：過去Ⅰ・Ⅱを扱う ・子どもの時の真一の気持ちをとらえさせる。		
第1時 個	A1・B1～2	・教材本文（過去Ⅰ）の通読。語句・意味の確認をする。 ・おおまかな内容をつかむ。
第2時 個→集団	B3・D1～3 F1	・神様の第一印象（過去Ⅰ）をとらえる。 ・真一の心情の変化を追う。
第3時 個	B1～2	・教材本文（過去Ⅱ）を通読する。語句・意味の確認をする。 ・おおまかな内容をつかむ。
第4時 集団→個	F1～3	・真一の心情に対し、他者（班員）と意見交換を行う。 ・他者の意見を聞くことによって自分の読みを深め、ものの見方や考え方を広げる。
次の指導へのつながり		感想文・チェックシートの活用

○第2学年（4時間扱い）

場面：現在Ⅰ・Ⅱを扱う。（過去Ⅰ・Ⅱも併せて扱う） ・さまざまな人物の立場に立って考えさせる。		
第1時 個	A1～3 B1～2	・教材本文（現在Ⅰ・Ⅱ）の通読。語句・意味の確認をする。 ・おおまかな内容をつかむ。
第2時 個	A4・D1～3 F1	・登場人物のせりふに込められた心情をさぐる。
第3時 集団	F3	・登場人物のせりふに込められた心情に対し、他者（班員）との意見交換を行う。
第4時 検証授業 集団→個	F2	・登場人物のせりふに込められた心情に対し、他者（他の班）の意見を聞くことにより自分の読み深める。
次の指導へのつながり		手紙・チェックシートの活用

○第3学年（4時間扱い）

場面：現在Ⅲ・Ⅳを扱う。 ・主題をつかんで自分の意見を明らかにさせる。		
第1時 個	B1・2 A1～3 D1	・教材本文（現在Ⅲ・Ⅳ）を通読。語句・意味の確認をする。 ・おおまかな内容をつかむ。 ・登場人物の心情が強く表れている語句・会話文をつかむ。
第2時 個	A4・B3 D2・3 E1～3 E4	・語句や会話文に表れている登場人物の心情及びその変化をつかむ。 ・真一の心情から主題や作者の考えについて考える。 ・主題に対する自分の意見をもつ。
第3時 集団	F1～3 F4・5	・主題や作者の考えに対し他者との意見交換を行う。 ・全編を読み、今後の自分の生き方、考え方につなげる。
第4時 個	F4・5	・自分が過去に書いた感想文・手紙を読み、自らの変容を確かめる。
学習のまとめ		書評・チェックシートの活用

③ 指導案（第2学年、4時間扱いの第4時）

	学習活動	指導上の留意事項	学習活動における具体的な評価規準と評価方法
導入	<ul style="list-style-type: none"> 他者の意見を聞くことで、自分の考えに自信をもったり、新たな考え方を知ったりする。 (現在Ⅰ・Ⅱ) (学習プリント4) (学習プリント5) 	他の生徒の意見を聞かせることで、自分の考えに自信をもたせたり、新たな考え方を知らせたりする。 (現在Ⅰ・Ⅱ) (学習プリント4) (学習プリント5)	<ul style="list-style-type: none"> 他者の意見を聞くことによりさらに読みを深める。 【ものの見方や考え方】 < F 3 > 読書の楽しみを知る。 【関心・意欲・態度】
展開	<ul style="list-style-type: none"> ※各班ごとに座る。シートを黒板に掲示する。 (発表者1～2名、掲示係3名) ※「発表する」「聞く」際の留意点を説明する。 活動1 各班ごとに、登場人物の会話文の中で共感したせりふと、そうでなかったせりふやその理由について発表し、班の人や他の班の意見を聞いて自分で気付かなかったこと、共感したことを書く。 	指示1 自分たちの班の意見を発表すると同時に、他の班の意見を聞き、自分で気付かなかったことや共感したことをまとめさせる。	<ul style="list-style-type: none"> 他者から話題を求め、話したり聞いたりして、自分のものの見方や考え方を広めたり、深めたりする。 【ものの見方や考え方】 < F 2 >
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ※1 1年次で学習し、作成した【過去Ⅰ・Ⅱ】の部分の文章についての感想文を読む。 ※2 『文学的文章を読むことチェックシート』を記入することにより、自分が学んだこと、考えたこと変容したことを確認する。 活動2 (発展) 主人公から葉子あるいは菜々子への手紙を作成する。 (支援) 自分の立場で葉子あるいは、菜々子への手紙でも可能とする。 	<ul style="list-style-type: none"> ※1 1年次に比べ、読みが深まっていることに気付かせる。 ※2 作品を学習することにより自分が何を学んだか、また、どう変容したかを自己評価させる。 指示2 主人公の葉子への思いや自分にとっての【さかあがりの神様】への思いを表現させる。 ※全員の手紙を文集という形でまとめる 	<ul style="list-style-type: none"> 立場の違う人物の考えを理解する。 【関心・意欲・態度】

(資料1) 「文学的文章を読むことチェックシート」(生徒用)例 2年「さかあがりの神様」

		文学的文章の規準	2年
A 語句の 意味や 用法		目標1年 文脈の中における語句の意味を正確にとらえ、理解すること。	
		目標2・3年 文脈の中における語句の効果的な使い方について理解し、自分の言葉遣いに役立てること。	
	1	文章の中で語句がどのような意味で使われているか分かった。	
	2	文章中の出来事や登場人物の行動を表す語句を見つけることができ、文章中での意味が分かった。	
	3	文章中の登場人物の気持ちや考えを表す語句を見つけることができ、文章中での意味が分かった。	
	4	文章中の語句に登場人物の行動・気持ちやその変化が表れていることが分かった。	
	5	文章の中で使われている語句を、自分が話したり書いたりすることに役立てることができた。	
B 内容把握 や要約		目標1年 文章の展開に即して内容をとらえ、目的や必要に応じて要約すること。	
	1	5W1Hが分かった。	
	2	文章中の出来事や登場人物の行動を順を追って読みとることができた。	
	3	登場人物の行動や気持ちの変化が分かった。	
	4	登場人物の行動や気持ちの変化が書かれているところを見つけ、要約することができた。	
	5	登場人物の行動や気持ちの変化などを必要な条件(文字数、キーワード)を満たして要約することができた。	
C 構成や 展開		目標1年 文章の中心の部分と付加的な部分、事実と意見などを読み分けて、文章の構成や展開を正確にとらえ、内容の理解に役立てること。	
		目標2・3年 書き手の理論の展開の仕方を正確にとらえ、内容の理解や自分の表現に役立てること。	
		※この指導事項は、「文学的文章」では該当しないため、ここでは省略した。	
D 表現の 仕方		目標2・3年 表現の仕方や文章の特徴に注意して読むこと。	
	1	説明する言葉、比喩、会話文などいろいろな表現に注意して読むことができた。	
	2	説明する言葉、比喩、会話文などに表れている登場人物の行動や気持ちを理解しながら読むことができた。	
	3	説明する言葉、比喩、会話文や、言葉遣い、言い方の違いに注意することによって、登場人物の行動や気持ちの変化を読みとることができた。	
	4	文章に表れた説明する言葉、比喩、会話文や、言葉遣い、言い方の違いを、自分が話したり書いたりすることに生かすことができた。	
E 主題や 要旨と 意見		目標1年 文章の中心の部分と付加的な部分、事実と意見などを読み分けて、文章の構成や展開を正確にとらえ、内容の理解に役立てること。	
		目標2・3年 書き手の理論の展開の仕方を正確にとらえ、内容の理解や自分の表現に役立てること。	
	1	話の展開をおさえて主題(テーマ)を考えることができた。	
	2	主題(テーマ)をふまえて人間・社会・自然などについて考えることができた。	
	3	作者の気持ちや考えをつかむことができた。	
	4	主題(テーマ)をふまえて人間・社会・自然などについて自分の意見をもつことができた。	
	5	作者の気持ちや考えをふまえて人間・社会・自然などについて自分の意見をもつことができた。	
F ものの 見方や 考え方		目標1年 文章に表れているものの見方や考え方を理解し、自分のものの見方や考え方を広げること。	
	1	文章のある部分に表れた登場人物のものの見方や考え方を理解することができた。	
	2	それぞれの登場人物の立場に立って読み、新たなものの見方や考え方を発見することができた。	
	3	それぞれの登場人物の立場に立って読み、共感したり批判したりすることができた。	
	4	登場人物と自分の相違点を考えたり、他の考え方を知ったりして、自分自身の判断を確かめたり、より広いものの見方や考え方をすることができた。	
	5	日常生活において自ら読書し、1～4のことを実現することができた。	
用 G 情報 の活		目標1年 様々な種類の文章から必要な情報を集めるための読み方を身に付けること。	
		目標2・3年 目的を持って様々な文章を読み、必要な情報を集めて自分の表現に役立てること。	
		※この指導事項は、「文学的文章」では該当しないため、ここでは省略した。	

※このチェックシートは生徒自身の評価に役立てるため、文末表現を「～できた」「～分かった」とした。

(資料 3)

「他の生徒から学ぶ学習形態」として、グループ（班）で意見交換を行い、班としての意見をまとめさせた。意見交換を行ったことで新たな発見をし、自分の意見に自信をもつことができた生徒が多く、見方や考え方が広がったようであった。

『さかあがりの神様』学習プリント 4
グループで意見交換しよう 二年 () (組) () (番)
☆グループの人の意見を書きなさい。

班員	A	B	C	D	E
思ったこと、考えたこと、知ったこと	(葉子) () () () () 葉子の負けず嫌いな性格が著地を張ってると思った。	(葉子) () () () () 矛盾しているように思える。	(葉子) () () () () 小この葉子の気持ちをよくわかってると思った。	(葉子) () () () () 葉子はまだ小こにだけ真一が見ていないところでは大人だと感じて	(葉子) () () () () わかんない

☆班でまとめたこと

私たちの班は(葉子)の(葉子)であなたが思っているよりずっと大人なんだから
その会話文には共感できました。

その理由は(真一)が見ていないところを手伝いをしていたりたかしのめんどろをみていたりして(真一)が()だからです。

葉子のことなんにもわかっていなかった ()だからです。

私たちの班は(葉子)の()はいいよね、
どういって()知らないから ()という会話文が印象に残りました。
その理由は(葉子)はまだ子供だし、親がかまってくれないから
さみしいのはわかるけど(真一)が忙しいのをもう少し()だからです。

(資料 3)

今回、指導例として提示した「さかあがりの神様」のほかに、「読むことチェックシート」を活用しながら、生徒の発達段階に応じて何度かに分けて提示し、個の感じる力を生かしながら読みを深めていくことが可能な文学作品として次のような作品も挙げられる。

- | | |
|----------------|---------------|
| 「サーカスの馬」 安岡章太郎 | 「よだかの星」 宮沢賢治 |
| 「父の詫び状」 向田邦子 | 「野菊の墓」 伊藤左千夫 |
| 「車掌の本分」 かんべむさし | 「清兵衛と瓢箪」 志賀直哉 |
| 「蜜柑」 芥川龍之介 | 「蠅」 横光利一 |
| 「高瀬舟」 森 鷗外 | |

(4) まとめ

文字言語班では、「個の考える力・感じる力を生かし、文学作品の読みを深める指導と評価の工夫」という副主題に基づき研究を進めてきた。ここでは、検証授業を行いながら改善を重ねていく中で得られた成果と今後の課題についてまとめる。

① 成果

ア 「重み」のある作品を教材として取り上げることについて

各学年にわたり複数回に分けて指導する計画を立てたことで、今まで一単元としては長すぎて扱えなかった「重み」のある作品（5ページ参照）を教材として授業に取り入れることができるようになった。（今年度は、第2学年において検証授業を行った。）

また、一つの教材を複数回に分けて取り上げることにより、以前には十分に読み取れなかった内容が読み取れるようになり、長い文学作品を読み通したという充実感や達成感を生徒にもたせることができた。

一つの作品について単元の構成を分割することで、異なったねらいや内容に基づく授業計画が可能になり、生徒の発達段階に応じた目標設定ができるようになった。

イ 読むことのチェックシートについて

今回、用意したチェックシートは、説明的文章及び文学的文章の両方に使えるものとして作成した。学習指導要領を踏まえ指導内容を段階的に整理した指導者用と、基本的に内容は同じだが平易な語句を使った生徒用の二種類を作成した。

このチェックシートにより教員は、育てたい言語事項を段階的・系統的に考え、指導と評価の一体化を図るための資料として活用することができた。また、生徒は、学習上のポイントをチェックシートの項目で確認することにより、自分自身の「読むこと」に関する習熟の変化を自覚することができ、自ら次の学習への目標を適切に設定することができるようになった。

ウ 「個 → 集団 → 個」による学習の形態について

学習の過程でグループ討議や発表などの場を設定することは、生徒にとって様々な実体験や読書の機会が減少している中、作品に表れているものの見方や考え方を理解し、読みを深めるために有効であった。最初に自分の考えをもち、他の意見を聞くことで、自分自身の考えとの共通点や相違点に気付くことが重要であり、「個→集団→個」の形態の学習を効果的に行うことで、より広いものの見方や考え方ができるようになった。

② 今後の課題

- ・ 個に応じた指導の一層の工夫が重要である。チェックシートで自己評価の低かった生徒については、学習活動が円滑に行われるよう指導上の配慮を行う必要がある。
- ・ 一つの作品を複数回に分けて指導するため、次の授業への「つながりの工夫」が大切である。今回は、1回目から2回目を感想文でつなげ、2回目から3回目を手紙文という形をつなげた。特に学年を超えて教材を取り扱う際には、それぞれの指導目標や内容を明確にするとともに、授業内容を効果的につなげる方法の工夫が必要である。

IV 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

研究主題である「考える力、感じる力を高める個に応じた指導と評価の工夫」について、今年度は二つの分科会に分かれて研究を行った。

第1分科会では主に「話すこと・聞くこと」の力、第2分科会では主に「読むこと」の力の育成に焦点を当てた。いずれの分科会も、生徒が「自分自身の学習の状況について気付くことのできる手だて」を重視しながら、「考える力」と「感じる力」の向上を図ることを目指して研究を行った。

研究の過程で、生徒の「考える力、感じる力」を高めるためには、具体的な指針の必要性が明らかになったことから、両分科会とも、生徒自らが自己の学習状況を把握でき、また客観的評価のよりどころとなるチェックシートの作成を行った。

第1分科会では、このチェックシートを群読の授業で活用することにより、具体的な到達度目標が生徒にとって明らかになった。また、「話すこと・聞くこと」の力を、個々の学習の状況に応じて身に付けさせることができた。

第2分科会では、一つの文学作品を複数の学年にまたがって読み進めるという授業を計画した。3年間を見通したチェックシートを活用することにより、系統的な学習が可能になるとともに、生徒が自分自身の「読む力」がどの程度高まっているかを段階的に理解することができた。

個に応じた指導と評価という観点で、これらの実践についての成果をまとめると、次の2点が挙げられる。

- ① 単元における到達度目標を、長期的見通しをもって学習計画に位置付け、生徒にできるだけ具体的に示すことが重要である。
- ② 一人一人の到達度に応じて、学習意欲が向上するよう、自己の学習の状況が分かる目標や評価の観点を提示することが重要である。

(2) 今後の課題

「考える力、感じる力を高める個に応じた指導と評価の工夫」について、二つの異なる観点から研究を行ってきたが、両分科会で試みた手法は、どちらも継続的な実践を行った上で初めてその効果が確認できるものと言える。今後、指導の場面に応じてさまざまな修正を加えながら、効果の検証及び方法の確立を図っていく必要がある。

「考える力、感じる力」は、すべての知的活動における原点であると考え。教育活動全体を通じて、それらを高めるための工夫が必要となる。その意味からも、これからの国語教育の果たす役割は大きい。

今回は、「話すこと・聞くこと」及び「読むこと」について研究を行ったが、「書くこと」を含め、相互に関連するこれらの言語能力を、国語科の授業実践の中で、具体的に、また、客観的に生徒に身に付けさせる工夫を重ねていきたい。

平成17年度 教育研究員名簿（ 中学国語 ）

	区市町村名	学 校 名	氏 名
第 1 分 科 会	目 黒 区	第 三 中 学 校	萩 原 美 香
	杉 並 区	高 井 戸 中 学 校	龍 万 里 子
	練 馬 区	大 泉 中 学 校	須 貝 牧 子
	江 戸 川 区	大 瑞 江 中 学 校	○松 澤 亮
	八 王 子 市	第 七 中 学 校	図 師 さ や か り
	調 布 市	第 三 中 学 校	鈴 木 ゆ か り
第 2 分 科 会	江 東 区	深 川 第 七 中 学 校	中 村 都 子
	世 田 谷 区	駒 沢 中 学 校	○安 川 和 男
	世 田 谷 区	駒 留 中 学 校	内 田 美 穂 子
	足 立 区	東 島 根 中 学 校	石 井 謙 次
	立 川 市	立 川 第 九 中 学 校	堤 浩 子
	東 久 留 米 市	西 中 学 校	安 藤 み よ 子

○世話人

担当 東京都教職員研修センター指導主事 山本 聖志

平成17年度教育研究員研究報告書

東京都教育委員会印刷物登録
平成17年度 第12号

平成18年1月16日

編集・発行 東京都教職員研修センター
所在地 東京都目黒区目黒一丁目1番14号
電話番号 03-5434-1974
印 刷 株式会社 今 関 印 刷